

2018 年度

北海道の労働と福祉を考える会

2019 年 3 月 16 日

総会資料

目次

1. はじめに(今年を振り返って)(海老澤)	p.1
2. 活動概要(楠)	p.2
3. 人数調査(大野)	p.3
4. 炊き出し(海老澤、関本)	p.4
5. 夜回り(越橋)	p.5
6. 同伴・フォローアップ(小川)	p.8
7. お世話になった関連団体の皆さま/寄付をいただいた皆さま(山内)	p.9
8. 会計報告(波田地)	p.10
9. 2018 年度役員・会員名簿(加藤)	p.12
10. 審議事項(山内)	p.13
11. 私とろうふく会	p.15

1. はじめに(今年を振り返って)

今年度は昨年度に比べ相談件数は少なかった。長らく路上生活を続けていた方が路上を去ったこともなかった。健康を限界まで害し、已む無く望まぬ選択をせざるを得ないという事態が生じなかったのは幸いだったと感じる。しかし、今年度はたまたまそういった方が現れなかっただけであって、現状健在の方の内にもいずれはそのような事態に直面する人はいるだろう。今年度は路上で倒れる人が居なくて良かったとその場しのぎの安堵を感じてしまいいながらも、路上生活者がいつか音を上げるのを待つことしかできないのだろうかという無力感を感じずにはいられない。

相談件数が少なかったのは事実であるが、それぞれの相談内容は決して軽いものではなかった。事務局の深刻な人手不足のために殆どの相談対応について山内代表、小川副代表、波田地事務局員に頼り切りになってしまった。具体的な内容は記すわけにはいかないが、如何なる言葉を以てしても表現に不足なほど深刻な事態への対応も数件あった。取り分け深刻な相談に限らず、今年度相談対応された会員の方々は本当にお疲れ様でした。

相談への対応の負担が集中したことからも分かるように、今年度のある意味において最大の問題は人手不足だった。会員は増えた。随分遠方からご足労頂いた方も少なくはなかったし、新しく会員が増えると会内の幾らかマンネリ化した雰囲気も払拭され、活動に新たな要素が加わることもあった。しかし、今年度新たに会員になった方は殆ど社会人であったし、遠方にお住いの方も多いために平時の活動への参加が出来る会員は昨年度と同様減少している。労福会の現状に対し「学生主体」という言葉は既に成り立っていない。事務局を構成する学生は殆ど大学院生であるから、一般に学生という言葉から想像されるような長期休暇などありはしない。時期によっては月に休日が1日、2日しかないことも珍しくない。来年度は更に学生が減り、実際に平時の活動に参加出来るであろう学生は殆どいない。これに伴い事務局の内の少人数の活動の負担は増える一方である。

人手が減れば当然今まで出来ていたことすら出来なくなっていくかもしれない。今年度は何とか例年通りの活動が出来たが、来年度以降はどうであろうか。発足 20 周年を前に、今後のことを思うと気が滅入るばかりである。

2. 活動概要

表 2.1 2018 年度活動概要

月	日	運営会議の議題・その他	夜回り人数			
			参加	駅前	地下	狸小路
2	3	【行事】冬の炊き出し（市民ホール）、司法書士会と共催	-	-	-	-
	10	総会資料の担当分担を決定	8	6	11	9
	17	総会資料の担当分担続き、労福携帯の持ち回り制など	12	11	12	11
	24	総会資料続き、韓国から来たNさん報告				
3	3	総会について	12	3	11	8
	10	総会の期日告知	11	6	9	9
	17	【行事】定時総会				
	24	総会資料の発送について	15	13	9	9
	31	労福携帯の持ち廻り決定、ロッカーの鍵	17	6	11	9
4	7	「炊き出しについて考える会」、健康調査報告（西山会員）	16	10	14	5
	14	「炊き出しについて考える会」②、社会貢献助成金（小川副代表）	16	6	14	11
	21	新入生歓迎会の決定	15	5	22	5
	28	【行事】新入生歓迎会				
5	5	「炊き出しについて考える会」③、今年度の事務局員決定	16	8	14	5
	12	★この時期、北海道TVの取材依頼をきっかけに、メールで活発な議論有り	16	9	14	8
	19	6/23炊き出し担当決定、取材に対する対応について決定	不明	9	19	5
	26	ピラのデザイン変更、他団体の炊き出し会場地図作成				
6	2	炊き出しにおける演奏会、労福会の知識共有サイト	14	6	10	5
	9	炊き出しメニュー決定、係内打ち合わせ	12	4	5	9
	16	炊き出しの最終打ち合わせ	13	4	14	9
	23	【行事】労福会オリジナルの炊き出し：チラシ寿司、味噌おでん/演奏会				
	30	炊き出しの報告とりまとめ	8	2	17	5
7	7	炊き出し報告、同時進行夜回り報告	11	7	18	7
	14	上半期（1～6月）の反省、既存ドキュメントの整理について	11	5	9	8
	21	新規会員の募集、支援活動の報告について	11	3	12	5
	28	情報の確認作業、メーリングリストの迷惑メールについて				
8	4	次回炊き出しについて	12	11	10	5
	11	次回炊き出しの場所、メニュー、催事など	9	6	12	6
	18	会費未納者について、支援活動報告書の取り扱い		4	12	6
	25	休み				
9	1	新規会員勧誘の役割担当、10月の夜回り期日変更	10	7	10	6
	8	★胆振東部震災直後の夜回り	15	9	8	7
	15	フードバンクに物資が無い場合の対応、10/20炊き出し担当決め	14	5	14	12
	22	休み				
	29	エルプラザ調理室の抽選	8	6	9	9
10	5	★金曜日の夜回り		4	5	16
	13	10/20共催炊き出しの担当決め	11	8	11	11
	20	【行事】秋の炊き出し（中央区民ホール）、司法書士会と共催				
	27	12/22炊き出し				
11	3	12/22炊き出し役割分担、道庁からのアンケート調査依頼について	11	5	9	8
	10	12/22炊き出しのメニュー、催事など	8	5	13	8
	17	12/22炊き出しの担当決定	8	7	6	7
	24	12/22炊き出しのタイムテーブル				
12	1	厚労省委託の野宿者人数調査の日程について	8	8	5	4
	8	当事者の個人情報漏洩	11	7	10	6
	15	12/22炊き出しの最終調整	11	9	8	7
	22	【行事】労福会X'mas炊き出し（中央区民ホール）海鮮丼とケーキ/合唱会				
	29	★年最後の夜回り	9	3	11	5
1	5	1/27概数調査	8	6	8	9
	12	概数調査の詳細決定	8	7	7	9
	19	概数調査の詳細最終打ち合わせ	12	10	9	10
	27	【行事】野宿者人数調査（概数調査）				

3. 人数調査

本章では、平成 30 年度実施の路上生活者概数調査（以下、本調査）について、(1) 調査概要、(2) 調査結果という点に絞って説明する。

(1) 調査概要

本調査は、厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）」に基づき、札幌市から委託を受けて実施されたものである。本調査の概要は以下のとおりである。

<調査目的>

ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法およびホームレスの自立の支援等に関する基本方針に基づき実施される施策の効果を継続的に把握することである¹。

<調査対象>

ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法第 2 条に規定する「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所として日常生活を営んでいる者」（以下、路上生活者）である²。

<調査方法>

札幌市を札幌駅周辺、札幌駅南部・大通公園北部、大通公園南部、大通公園東部、狸小路・すすきの、札幌市郊外東部、札幌市郊外西部、札幌市郊外南部・河川敷、札幌市郊外北部に分けて調査員の巡回・目視により実施した。路上生活者であると思われる者を発見したときは調査票の必要事項（場所・性別・確認時刻など）を記入した。

<調査時期>

平成 30 年度 1 月 26 日午前 3 時 00 分から同日午前 6 時 00 分にかけて実施。

(2) 調査結果

本調査の結果、43 名の路上生活者が発見された。厚生労働省では「都市公園」「河川」「道路」「駅舎」「その他施設」の 5 区分及び性別（女性・男性・不明）で集計しており、これに従えば以下のようなになる（表 3.1）。

表 3.1 発見場所及び性別の路上生活者数

	都市公園	河川	道路	駅舎	その他施設	合計
女性	0	0	0	0	1	1
男性	2	1	5	3	17	28
不明	0	2	0	12	0	14
合計	2	3	5	15	18	43

本調査の結果は前年比+8 名である。40 名を超えたのは 2014 年度以来 4 年ぶりである。それでも全体としては減少傾向にあるといえる（図 3.1）。

¹ 厚生労働省 HP「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）：統計の概要」（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/63-15a.html#link01>）。

² 同上。

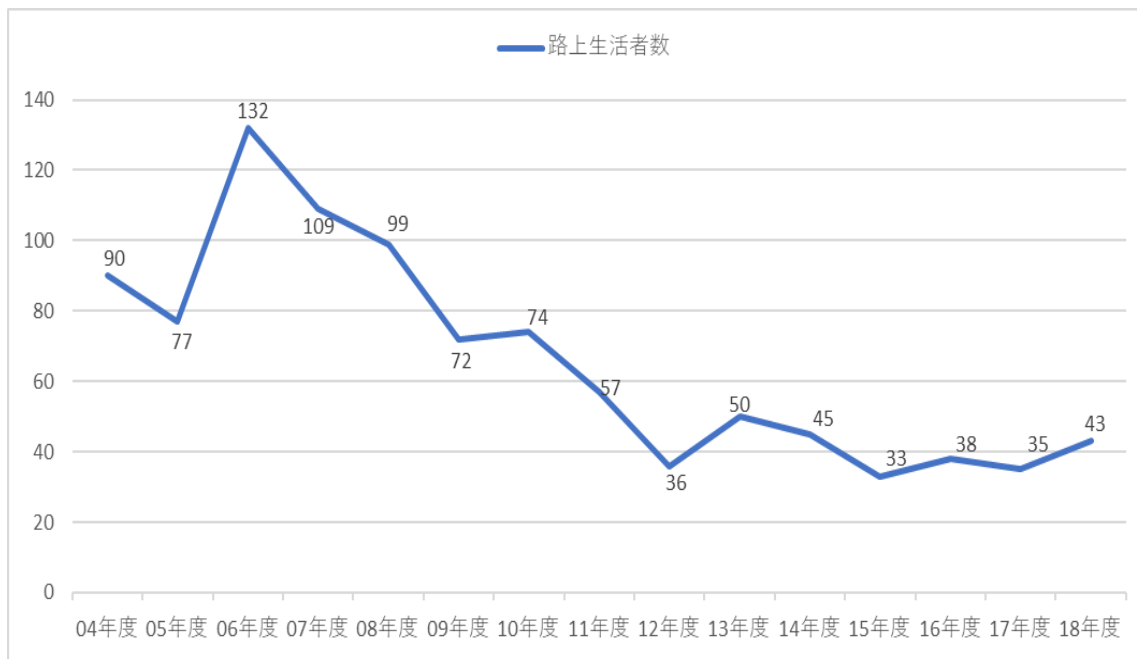


図 3.1 路上生活者数の推移

本章は以上である。本調査の結果が路上生活者支援、政策に有効に活用されることを期待したい。

4. 炊き出し

今年度は労福会主催で 6 月 23 日(土)(於中央区民センター)、 12 月 22 日(土)(於中央区民センター)の 2 回、司法書士会との共催で 10 月 20 日(土)(於中央区民センター)、2 月 23 日(土)(於わくわくホリデーホール)の 2 回で計 4 回の炊き出しを行った。

2018 年 6 月 23 日

居酒屋なみすけに厨房を借り、調理班が調理した「祭り」をコンセプトにしたメニュー（味噌田楽、ちらし寿司、フランクフルト）を出食した。食事は十分な量を提供でき、好評だった。米本智昭会員の企画により、オーボエ、ヴァイオリン、ピアノの演奏が催され大変好評だった。演奏された曲はクラシック(主よ人の望みの喜びよ、カッチーニのアヴェマリア、チャルダッシュ)、映画音楽(シェルブールの雨傘、ガブリエルのオーボエ)、洋楽(マイウェイ、明日に架ける橋、タイムトゥセイグッバイ)、歌謡曲(美空ひばり、大空と大地の中で、知床旅情、虹と雪のバラード)など多岐にわたり、歌謡曲の演奏中には来場者が曲に合わせ歌うなど、普段の炊き出しとは少し違った和やかな雰囲気が感じられた。来場者数の正確な記録は残っていないが、40 名前後であった。

2018 年 10 月 20 日

この炊き出しは司法書士会との共催で行われ、食事（お弁当）・衣類の配布、散髪、法律クイズが実施された。会場の予約から理容師（ボランティア）の手配、弁当の準備などほとんどのことは司法書士会が行っており、労福会はコーヒー等の飲料と生活用品（タオル、石鹸、カミソリ、カップ麺など）を準備し、当日の流れに沿って補助的な役割を行っている。もう少し労福会としても企画を考えて主体的に参加することを考えてもよいかもしれない。来場者数は 36 名であった。

2018 年 12 月 22 日

居酒屋なみすけに厨房を借り、海鮮丼、あら汁に加えクリスマスに因んだメニューとしてクリスマスケーキ（ロールケーキ）を出食した。海鮮丼とあら汁についてはなみすけ店主同伴の下、関本会員を中心とする会員数名で中央市場にて当日早朝に仕入れた品を使用した。食事は不足することなく十分な量を提供でき、大変好評だった。また、柿崎会員を中心にクリスマスソングの合唱会が催され、会員、来場者とも聞き入る姿が見られた。6 月の炊き出しの際も感じられたことであるが、演奏会のような催しは予想するよりも遥かに会場の雰囲気をややかにする力があるように思われる。静いの予防という見方はあまりに露骨で興ざめであるが、穏やかな時間を過ごす上で可能な限りで積極的に行うべきであるかもしれない。当初は Sapporo Dance Collective by ConCarino の劇団員の方々によるダンスの実演が催される予定であったが、残念ながら諸事情により実演は行われなかった。しかし、参加が可能な劇団員の方々が家族連れで炊き出しに参加し、こども達が無邪気にはしゃぐ様子を見て、来場者もなおのこと和やかな様子であった。来場者数は 31 名であった。

2019 年 2 月 23 日

この炊き出しは司法書士会との共催で行われ、食事（お弁当、味噌汁）・衣類の配布、散髪、法律クイズが実施された。来場者数は 34 名、法律相談件数は 2 件であった。近年の傾向と同様、来場者数は少なく、来場者全体に占める路上生活者数の割合は低かった。

今回の炊き出しではいくつか問題が発生した。時々起きる来場者間での言い争いや、会員でない参加者が過度に来場者に関与する出来事等である。このような出来事が起きた場合には会員個人では判断の難しいことがあるため、当日の責任者などを中心とした情報共有体制が必要と考えられる。

炊き出しの運営に当たりご協力いただいた方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

5. 夜回り

前年度に引き続き第 4 週を除く毎週土曜日に札幌、大通、狸小路の 3 コースに分かれ夜回りを行った。配布物はフードバンクから頂いたパンと温かいお茶で、冬季間はたくさんのカイロの寄付を頂いたことから定期的に出会った方々に配布できた。

今年は北海道では前例のない大地震に見舞われた年だった。9 月 6 日、胆振東部を中心に震度 7 の揺れが襲い震源付近の発電所が停止、全道に地震の被害は広がった。営業を再開したスーパーやコンビニでは食料品を中心に商品が棚から消え品薄状態に。夜回り活動でも地震の影響は例外でなく、フードバンクが 2 週にわたってパンの提供がストップした。間に合わせのためカップ麺を購入したが、食料品の寄付をしてくださる方がおり出会う方々の体調や近況を伺い食料を渡すことができた。

以下の表は夜回りで出会った人の人数と参加者の各月の平均人数である。

表 5.1 2018 年度の夜回りで出会った人数と活動参加者の各月平均

(判明分のみで算出 値は少数第 2 位を四捨五入)

実施月	札幌駅	大通	狸小路	合計	活動参加者 人数	活動参加者人数 (2017 年度)	
2018 年 3 月	5.8	11	8.8	25.6	13.8	2017 年 3 月	
4 月	7	16.7	7	30.7	15.7	4 月	15.8
5 月	8.7	15.7	5.3	29.7	16	5 月	13
6 月	4	14	7	25	11.8	6 月	12
7 月	6	13.5	7.5	27	11	7 月	11.3
8 月	5	12	6	23	9	8 月	13.5
9 月	6.8	12	7.8	26.6	11.8	9 月	14.5
10 月	8	11	11	30	11	10 月	9.5
11 月	5.7	9.3	7.7	22.7	9	11 月	17
12 月	6.8	8.5	5.5	20.8	9.8	12 月	11.8
2019 年 1 月	7.7	8	9.3	25	9.3	2018 年 1 月	18
2 月	8.7	12.3	7	28	9	2 月	10
年間平均	6.7	12	7.5	26.2	11.4	年間平均	12.2

昨年度(2017 年 3 月～2018 年 4 月)の夜回りで出会った人々の数は活動 1 回あたり、平均 23.1 人だった(2017 年度総会資料第 7 章表から算出)。今年度は 26.2 人で会う人数は前年度に比べ 3.1 人増加している。毎年、会では人手不足が囁かれているが夜回りの参加者は今年度の平均、11.4 人で前年度に比べ 0.8 人減少という結果となった。

最近の特徴として言えるのはいつも定期的に会う人々の中で路上生活をしている人が減少し、初見で声を掛けシェルター入所などの支援につながるケースが増えていることだ。

夜回りでは通りすがりの人に声を掛けることもあるが、顔なじみの人やそれらの人々が定期的に集まる場所へ行き、パンやお茶などを渡して世間話や体調や近況を伺う。それが現在は夜回り活動のメインとなっている。必ずしも 1 回の活動で、会う誰かがその先の支援につながるわけではない。路上生活ではない方々もひっきりめて支える活動を「誰のための支援なのか」と、路上生活をしている当事者から批判されることもある。

一方で夜回りの声掛けによって支援につながることも時々ある。今年度は前年度に比べ多かったように思う。初めて見る顔で怒られるのを百も承知で一步踏み込み腰を折って見知らぬ人に声を掛けた。すると、「実は…」と言われたりする。

初めて夜回りに参加した人からは「札幌に野宿している人がいたとは」という声をよく聞く。だがその驚きにも関わらず、この会ではなかなか初参加の方がなかなか活動に定着してくれない現状がある。それは当事者の方としばしば世間話で終わってしまう活動に魅力を感じられないことも一因にあるのかもしれない。

夜回りは生活に困っている方の暮らしを物質的に支えることだけでなく、毎週顔を合わせることが心を支えている側面もある。体調や近況を伺いその人の人生をともに考えていくことだけでなく、取るに足らない話をする、それは単調に見えるかもしれないが支援者との信頼を築き、人が集うきっかけを作っている。

表 5.2 夜回り人数詳細 人数欄サは札幌駅班、オは大通り班、タは狸小路班。

月	日	人数(名)			備考
		サ	オ	タ	計
3	3	3	11	8	22
	10	6	9	9	24
	24	8	13	9	30
	31	6	11	9	26
4	8	10	14	5	29
	14	6	14	11	31
	21	5	22	5	32
5	5	8	14	5	27
	12	9	14	8	31
	19	9	19	3	31
6	2	6	10	5	21
	9	4	15	9	28
	16	4	14	9	27
	30	2	17	5	24
7	7	7	18	7	32
	14	5	9	8	22
	21				
8	4				
	11	6	12	6	24
	18	4	12	6	22
9	1	7	10	6	23
	8	9	15	4	28
	15	5	14	12	31
	29	6	9	9	24
10	5	4	5	16	25
	13	8	11	11	30
	20				0
11	3	5	9	8	22
	10	5	13	8	26
	17	7	6	7	20
12	1	8	5	4	17
	9	7	10	6	23
	15	9	8	7	24
	29	3	11	5	19
1	5	6	8	9	23
	12	7	7	9	23
	19	10	9	10	29
2	2	9	10	11	30
	9	9	12	5	26
	16	8	15	5	28

6. 同伴・フォローアップ

労福会への電話相談は、近年その内容が複雑化してきているような印象をうける。単に生活保護の申請に同伴を求めるようなものではなく、既に受給中であつたり、他の制度・施設との関係があつたりなど、相談者たちがいわゆるホームレスと言われて思い浮かべるような状況の人々ではなくなっているのだともいえる。

たとえば住居はあるものの明らかに困窮しており、しかし本人の疾患のためにコミュニケーションが難しく、生活保護やその他の制度の利用に至らないケースがあつた。また、入居している施設から虐待を受け避難先を求めているケースなどもあつた。

もちろん一方ではこれまで通りのホームレスからの相談もうける。実はこれは以下に示す表には十分に現れていない。夜回り等で発見したホームレスで、希望する者については、その場ですぐにホームレス相談支援センターJOINのシェルターに入居させたり、あるいは病院につないで入院させたりしているが、そうしたケースについては慣例的に報告書が作成されていない。筆者の印象ではその数は少なくとも10を超えているはずである。

以上のようなことを踏まえた上で、下記の表を参考にしていきたい。報告書が提出されているのは下記の11件である。

年代	性別	支援内容
30代	男性	生活保護申請同伴、生活相談
不明	男性	シェルター同伴
50代	男性	生活相談、生活保護申請同伴
不明	男性	生活相談、病院同伴、入院時対応
50代	女性	生活相談
50代	男性	生活相談、病院同伴、入院時対応、社会的孤立防止支援、安否確認
50代	男性	生活保護申請同伴
	夫婦と子供の3人世帯	生活相談、生活支援
不明	男性	社会的孤立防止支援
不明	女性	社会的孤立防止支援、生活相談、生活支援
20代	男性	生活相談、シェルター同伴、社会的孤立防止支援

7. お世話になった関連団体の皆さま/寄付をいただいた皆さま

昨年度の総会資料では、「他団体との連携」というタイトルで書かれていましたが、連携と言っておきながら、労福会は「受け取ってばかり」で先方に何も返していないのではないかと反省しました。残念ながら今年度を振り返ってみると相変わらずお世話になりっぱなしで、こちらから何か働きかけることもほとんどなく終わってしまったように思います。そのため今年度はタイトルを「お世話になった関連団体の皆さま」とし、来年こそは連携と呼べるような活動を展開したいと思いを新たにしているところです。今年度もたくさんの皆さまにお世話になりました。

札幌福祉生活支援センター様には、今年度も毎回の夜回りの際に配布する食料品を提供していただきました。年間で40回以上となる夜回りでの配布を自分たちだけで調達するとなると、かなりの経費がかかります。財政の乏しい労福会にとって大変ありがたく、また、物資を取りに行く時間などの融通も聞いていただきいつも感謝しております。

また、9月6日（木）には胆振東部地震がありましたが、8日（土）の夜回りでは、**エールアライブ**様より大福と飲料の寄付をいただきました。震災による物流の問題で配布物資の手配が危ぶまれた中で、頼もしい申し出をいただき大変感謝しております。

今年度は夜回りや炊き出しにおいてカイロの需要が例年より大きかったように思います。冬の札幌で野宿をするという、一晩に複数枚のカイロを使用するという人も多いようです。**ビッグイシュー札幌**様および池袋を中心に活動している支援団体 **TENOHASHI の岡室**様からは断続的にたくさんのカイロを寄付していただきました。

札幌司法書士会様とは年2回の炊き出し相談会を共催させてもらっています。今年度に限らないですが、ここ数回は会場の手配なども含めた準備をほとんどお願いしていて、労福会は当日のお手伝いを少し行うといった程度になってしまいました。せっかくの共催企画ですから、来年度以降は、もっと労福会からも内容について提案できるようアイデアを考えたいと思います。

ホームレス相談支援センター（JOIN）様には、夜回りで出会った脱路上を希望する方たちの受け入れをいつも快く引き受けていただきました。また、今年度の人数調査では、実施直前になって参加をお願いしても、快く引き受けてくださいました。

炊き出し相談会を労福会が主催するときは、**居酒屋なみすけ**様の厨房や座敷をお借りして食事の用意をしています。また、メニューのアイデアを考えていただいたり、調理指導をしていただくなど、本当にお世話になりました。

○今年度寄付をいただいた個人の皆さま

今年度も労福会の活動に賛同いただいた皆様から多くの寄付を寄せていただきました。記して感謝申し上げます。
2018年2月～2019年1月の期間に寄付をいただいた皆様（順不同）

岡室恵様	嶺野幸子様	五十嵐文子様	折野宏一様	西島知佐様
小林幸一様	唐神知江様	石神幸郎様	播磨美樹様	野澤里美様
廣瀬知弘様	ジェラルド・ハルボーセン様	小野寺拓様		

8. 会計報告

2018年度 会計決算書 (2018.2.1～2019.1.31)						
				北海道の労働と福祉を考える会		
				会計担当：波田地		
1. 収支計算書						
【収入】						(単位:円)
勘定科目	年間計画(A)	中間決算(B)	差引(B-A)	内訳	金額	計画
会費	80,000	108,000	28,000	一般会員会費(42名)	98000	80000
				賛助会員(2名)	10000	
事業収入	400,000	451,653	51,653	実態調査(目視)	451653	390000
				実習受託料 北星学園	0	10000
助成金	-	150,000	150,000	ろうきん社会貢献基金	150000	
寄付金	90,000	216,500	126,500			
雑収入	300	5,016	4,716			
収入計	570,300	931,169	360,869			
【支出】						
勘定科目	年間計画(C)	決算(D)	差引(D-C)	内訳	金額	計画
活動費	509,000	582,870	73,870	夜回り	47,981	24,000
				炊き出し	281,836	200,000
				同伴・フォロー	18,580	35,000
				実態調査	234,473	200,000
				その他	0	50,000
組織費	155,000	51,085	-103,915	意見交換会	0	0
				組織対策費	8,211	30,000
				広報費	42,874	30,000
				研修費(学習会含む)	0	90,000
				連携費	0	5,000
運営管理費	192,000	168,709	-23,291	事務所費	96,340	91,000
				会議・通信・交通費	52,186	60,000
				事務消耗品費	4,677	6,000
				活動補助費	5,700	30,000
				雑費	9,806	5,000
支出計	856,000	802,664	-53,336			
当期収支	-285,700	128,505	414,205			

※正会員の会費収入の額は、前年度分の納入や重複納入により会員数と一致しない。

2. 資金収支計算書					
(1) 今期資金収支					
① 当期収支	128,505		今期の額⑥	前年度の額⑦	差し引き⑥－⑦
② 仮払金・未収入金の増	40,303		521,653	481,350	40,303
③ 未払金の増	-75,500		5,000	80,500	-75,500
④ 今期資金収支	12,702	①－②＋③			
(2) 繰越金の計算					
⑤ 前期繰越額	1,419,370				
④ 今期資金収支	12,702				
次期繰越金	1,432,072	⑤＋④			

(2) 簿外資産

【備品】

品名

品名	取得日	取得額	保管場所	摘要
デジタルカメラ	〃	14800	星園プラザ	
外付ハードディスク	〃	6800	星園プラザ	
パソコン(Lenovo)	2011.08.11	36440	星園プラザ	ディスプレイ故障
ボイストレック(IC 録音機)	2011.08.11	4930	星園プラザ	
データプロジェクタ	〃	53799	星園プラザ	
プロジェクタスクリーン	〃	11488	星園プラザ	
パソコン(富士通)	2016.04.09	2000	会計担当宅	

会計担当より：

2019年度は、計画よりも**＋36万869円**（前年度比＋29％）の大幅収入増となった。理由は昨年にく
く寄付収入の増加、計画になかった助成金（ろうきん社会貢献基金等）の受け取り、会員の増加によるところ
である。一方、支出は計画よりも**－5万3364円**（前年度比－14％）となった。項目別に見ると、**夜回り**と**炊
き出しは支出増**となった。助成金を使って、海鮮丼やクリスマスケーキなど豪華な炊き出しを実施することがで
きたといえる。**同伴・フォローは支出減**だが、支援活動報告書が未提出のため計上されていない活動もあり、従
来より不活発というわけではないと思われる。組織費については、本年は寄せ場交流会や越冬闘争に参加した会
員への交通費や参加費の助成がなかったため、**研修費**が減じている。

9. 2018 年度役員・会員名簿

2018 年度役員・事務局員・会員名簿（五十音順）

1. 役員

- (1) 代表 山内太郎
- (2) 副代表 小川遼
- (3) 事務局長 海老澤修一
- (4) 監査役 安東朋美、沼澤哲也

2. 事務局員（五十音順）

上杉雪華	加藤智彦	関本幸一
大野慶	楠高志	園部雄祐
小山田伸明	越橋宣之	波田地利子

3. 会員（五十音順）

安東朋美	佐々木宏
足立浄佑	須田伸
足立隆厳	関本幸一
五十嵐文子	園部雄祐
石橋孝彦	竹内有美
今井由郎	棚橋ますみ
上杉雪華	田村優実
内山明	唐神知江
海老澤修一	西山春菜
大瀧雅史	林周太郎
大野慶	松原有吾
大家佳子	成田充子
小笠原淳	布川敦士
小川遼	波田地利子
小倉菜穂子	平家勇大
小山田伸明	平田なぎさ
柿崎さとみ	水上さえ
加藤智彦	山内太郎
上川拓哉	山崎美来
亀山紗希	山田大樹
楠高志	山本朱莉
久保南	米本智昭
越橋宣之	渡辺豪
小林真弓	渡部友子
佐々木かおり	

10. 審議事項

1. 来年度の役員体制

- ・代表 山内太郎
- ・副代表 小川遼
- ・事務局長 (未定)
- ・事務局次長 (未定)
- ・監査 安東朋美、沼澤哲也
- ・支援者相談員 平田なぎさ

2019 年度は事務局長、事務局次長ともに不在のままスタートすることになる。

これまで労福会の事務局長は慣例的に学生が担ってきた。しかし、学生の会員は来年度大幅に減少する。当面は代表と副代表が会務を行うことになるが、事務局長は社会人であっても就任できるとしても、現状では今後、事務局長を担当する人がいるかどうかは見通せない。

誰かやってもいいという人いませんか？

2. 来年度の活動方針

現時点で予想される来年度の役員体制を考慮し、下記のとおり方針を立てた。

①会員の確保及び増員を目指す

今年度は目標であった会員数 40 名の確保は達成できた。しかし、活動の中心となってかかわる人材の育成が十分ではなかったといわざるを得ない。また、学生を対象にした？新規会員獲得の歓迎会を企画したが、学生の会員はほとんど増えなかった。このことの総括も含めて会員獲得に向けた動きを今年度の活動の第一に掲げたい。

②会員の学習機会を増やす

昨年度同様に労福会で学習会を企画するだけでなく、他団体が主催する学習会や研修会の参加費を補助する。今年度は予算に反映したが、具体的な執行がなかったと思われる。具体的にどのような企画に参加するかは都度運営会議等で議論して決めていくことにしたい。

③20 周年事業を企画する

2019 年度は労福会創立 20 周年にあたる。そのため記念行事を計画したい。ただし、現状の労福会の力だけでは困難であると思われるため、元役員だった人たちを中心に協力をお願いして実現したい。

3. 来年度の活動計画及び検討課題（カッコは確認事項）

事務局長不在でスタートするため、活動の継続が困難な場合も想定されるが、会員の惜しみない協力を期待して下記のとおり今年度をベースに活動計画を立てた。

①定例的な夜回りの実施（第 4 を除いた毎週土曜日というペースでよいか）

②年 2 回の炊き出しの開催（年 2 回という回数は適当か）

③年 2 回の司法書士会と共催での相談会の開催（司法書士会との役割分担は適当か）

④人数調査の受託（受託を目指すということด้วยいか）

⑤労福携帯のあり方

⑥労福独自の調査活動（実施を計画するか、その場合予算付けを検討するか）

⑦20 周年に向けた実行委員会の立ち上げ（メンバーはOB・OG中心）

4. 予算案

2019年度予算案は、活動方針及び活動計画を踏まえて、下記の点に留意して設計した。

①収入について、会員数を50名まで増やすこと、寄付金収入を2018年度と同等となることを想定して見積もった。

②支出については、組織対策費として4月～6月を強化期間とし、歓迎会費用を大幅に増やした。また、20周年企画の実施に伴う費用を計上し、今年度は研修費を縮小することで相殺を図った。

③収支は大幅な赤字になる見通しだが、無駄に貯めていてもしようがない。2019年度は会員の獲得に全力を尽くすべく、それなりの予算を執行することとしたい。

2019年度予算案(2019. 2. 1～2020. 1. 31)						
北海道の労働と福祉を考える会						
(単位:円)						
【収入】						
勘定科目		18年度決算	19年度計画	差引	19年度計画内訳	金額
会費		108,000	100,000	8,000	一般会員50名	100,000
事業収入		451,653	450,000	1,653	実態調査	430,000
助成金		150000	0	-		
寄付金		216,500	200,000	16,500		
雑収入		5,016	500	4,516		
収入計		931,169	750,500	30,669		
【支出】						
勘定科目		18年度決算	19年度計画	差引	19年度計画内訳	金額
活動費	夜回り	47,981	50,000	-2,019		
	炊き出し	281,836	200,000	81,836		
	同伴・フォロー	18,580	30,000	-11,420		
	実態調査	234,473	250,000	-15,527		
	その他の調査	0	0	0		
	20周年事業	0	200,000	-200,000		
	計	582,870	730,000	-147,130		
	組織対策費	8,211	240,000	-231,789	新歓イベント(2万×12回)	
	広報費	42,874	40,000	2,874	ビラ・会報の発行等	
	研修費	0	10,000	-10,000	研修参加費補助	0
					研修旅費補助	0
	連携費	0	5,000	-5,000	学習会	10,000
	計	51,085	295,000	-243,915	反貧困ネットワーク	5,000
運営管理費	事務所費	96,340	100,000	-3,660	事務所家賃	90,000
	会議・通信・交通費	52,186	60,000	-7,814	ロッカー賃借料	10,000
					会議費	10,000
					通信費	35,000
					サーバ更新費	8,000
					交通費	7,000
	事務消耗品費	4,677	5,000	-323		
	活動費補助費	5,700	30,000	-24,300	活動費補助(6名)	18,000
	雑費	9,806	33,000	-23,194	ボランティア保険(50名分)	15,000
計	168,709	228,000	-59,291			
支出計		802,664	1,253,000	-450,336		
今期収支		128,505	-502,500	481,005		

1 1. 私と労福会

私とろうふく会

上杉雪華

労福会の正式な会員となったのは今年からで、路上生活者と関わりを持つようになってから1年近く経つ。参加頻度は少なかったが、それでも夜回りや炊き出し、一つ一つの記憶が色濃く残っている。夜回りでは路上生活者との会話を通してその方の半生を聞くこともあり、1人の人間の人生に少し触れることができているような気に勝手になっていることもあった。

労福会の活動内容を友人や知人に伝えるとよく「そんなにホームレスの人っているの？」と言われる。私も正直、大学に入って労福会の存在を知るまでは路上生活者が札幌にこんなにいるとは思っていなかった。労福会に入ってから、街中で路上生活者らしき方を見つける機会が多くなったように感じる。それは、活動を経て路上生活が異世界の話ではなく現実で、かつ身近にあることだということを痛感したからなのではないだろうか。全ての現象において他人事なんてことはないのではないかと強く感じる。この感覚は労福会に入ったからこそ得られた。これからもこの感覚を大事にしていきたい。

ある夜回りの日、私が背負っているリュックと色違いのリュックを持っていると話しかけてくれた生活保護受給者の方がいた。嬉しくて思わず「えー嬉しい！使いやすいですねえ！」と少し大袈裟に反応してしまったのだが、後日炊き出しの日にその方が色違いのリュックを持参してニコニコ顔で私に見せてくれた。その方の記憶の片隅に私との会話が残っていたことがすごく嬉しくて、単純な私はそこで改めてあー労福会入ってよかったーと思った。

路上生活者に理不尽な理由で怒られてなんやねんって思うこともあったけれど、それだけ密に関わることができるのだろう。これからも路上生活者との関わりは続けていきたい。できれば朝までコースが常な労福会の飲み会についていけるような体力も持ち続けていきたい。

私とろうふく会

海老澤修一

平時の事務局の仕事や炊き出し等の仕事にご協力下さった方々、会の活動にご理解とご支援を下さった方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

私と労福会

大野慶

学生会員を獲得することが年間を通した課題であったように思う。わたしはこの点に関連して、社会福祉を志す学生があまり寄り付かないのはなぜだろうか、あるいは一度参加したきりで定着しないのはなぜだろうか、ということを考えることが多々あった。単純に学生らが本会の存在を知らないだけならよいのだが……。貧困・低所得、ホームレスが社会福祉・ソーシャルワークの対象であることにピンと来ていないのだろうか。

なんとまあ、「今年こそは」と思いつつ、2018 年度もまた「名ばかり会員」になってしまいました。まことに面目ないことです。

30 歳代半ばから労福会の周りをウロチョロし始めた私も、昨年には 50 歳を迎えてしましまして、正しい大人の場合はこれで「天命を知る」ということになるのですが、当然ながら天命どころか明日のことすら全然知りません。路上の問題に触れたばかりのころ、当事者の皆さんに 50 歳代が多く、「皆さん懸命に働いた挙げ句こんなことになってしまって」と切ない気分になったものですが、いざ自身が当時の人たちと同じ年齢になり、来し方を振り返ってみると、なんとおおよそ懸命に働いた記憶がなく、ますます面目ない限りです。

さらに面目ないことですが、一昨年書いた本の売れ行きがいつまで経っても芳しくないので、この場で勝手に宣伝させていただきますと、北海道警察の未発表不祥事を調べた『見えない不祥事』（リーダーズノート出版）という単行本です。本屋さんなどでお見かけする機会がありましたら、ホームレス歩手前のライターを助けると思ってご購入いただくと幸甚です。あと、目下ある版元から「おまえが見聞きしてきた札幌のホームレス事情を 1 冊にまとめてみろ」とのご注文を頂戴しておりまして、これが無事に陽の目を見ることになりましたら、次の総会資料でまた性懲りもなく宣伝させていただきます。

ほんとにもう、まったくもって面目ないことです。

「私と労福会」

小川 遼

いろいろあったはずなのに、この一年もあっという間だった。長く続けてきたせいなのか、忙しかったからなのか、歳のせいなのかわからない。

どんどんいろんなものが流れていってしまう。札幌を去る学生たちや、死んでゆくひとたち。街並みも変わっていく。悲しい。

新しいことを始めるとちょっと楽しくなったりするから、来年度は新しいことをいろいろやってみることにしよう。全体の勉強をもうちょっと本気でやってみたりとか。実は今も解剖学の本なんかを読んでいる。車の免許も取れそうなので、車で遠出してみるのもいい。他の武術をはじめてもいいし、陶芸も悪くないかもしれない。語学はだめだ。苦手だから。

とはいえ、あっという間に流れてしまった今年度だってなんだかんだ積み上がるものはあった。米本さんのおかげで人とのつながりも増えたり、沖拳会のおかげでたぶんいま（暴力的な意味で）自分史上最高に強い。長いことひっかかってきたアナキズムにかかわる問題にも整理がついた感じがする。オープンダイアログについても学べたのは良かった。本を一冊読んだだけなんだけど、実践に役立っている。整体技術も何らかのブレイクスルーが起きてちゃんと効果が出るようになった。全体的に人間についての理解が深まった気がする。

なのになんだらう。この穴のあいたような感じは。この穴はいつか埋まるのか、それともそのままなんだらうか。ぼちぼち積み上げている成果がわかりやすい評価に結びついていないのが悪いのかもしれない。あるいはちゃんと飯を食っていないのがよくないのか。酒が多すぎるのか。捻れた性格が災いしているのか。

こんなことばかり書いてると「自意識（笑）」とかいってバカにされるのでこのくらいにしておこう。そうだ。代わりに労福会員の支援活動に役立つであろういくつかのことを紹介することにする。最近の成果だ。

・自尊心に注意すること

場合によっては、うっかり誰かのプライドを傷つけてしまったために末代まで呪われることがある。危険だ。

また熱くなって言い争っている人々のたぶん半分くらいは相手を言い負かすことで傷ついたプライドを回復させようとしている。支援関係においてもプライドを傷つけると関係はこじれる。そもそも支援される側というのは支援されないと助からない状況にあるわけなので、すでにズタズタである場合が多い。慎重に扱わないといけない。

さらに自尊心と恋愛は近いところにある。こうした意味でも危険だ。『となりの怪物くん』という漫画で執拗に描かれていることなのだが、恋に落ちるキッカケがちょっと褒められたことだったりするのである。また漫画『クズの本懐』では教師である茜先生が生徒であるムギくんを、自尊心をくすぐることで手玉にする様子が描かれている。恋は悪いことではないのだが、支援者である我々は相談者に恋されると困ることが多いし、逆に恋すると社会的信用を失うだろう。こうした心の動きには敏感になっておくべきなのだと思う。

・ただ会話することを切り捨てないこと

以前、まだ学生の頃、病識はないが統合失調症と思われる人の相談を連日聞いていた時期があった。困りごとを解決してあげようといういろいろ提案したり、あるいは病院の受診を勧めてみたりしたが、どれも上手くはいかなかった。そもそも超常的な力をもったケースワーカーから嫌がらせを受けているという訴えをどのように聞いていいのかもわからなかった。ネットや本でしらべても、「否定も肯定もしない態度で」とかよくわからないことが書いてある。妄想を喋らせると症状を強化してしまうのではないかと考えられているからである。

しかし、先述のオープンダイアログという技法では、妄想についても話題にしてひたすら会話する。治療してやろうとか、入院させてやろうとか、そういうことは考えずにただ会話のために会話するのである。それによって症状が寛解さえするというのだ。詳しくは本でも読んでほしいが、これには勇気付けられる。つつい問題解決につながる有意義な会話を求め、そのために本人の話を遮ることさえしてしまうことがあるが、何が有意義なのかというのは一方的に決めるべきではないだろう。ただ会話する。どこに向かい、どのような結果をもたらすかわからないが、会話を続ける。それでもいい。むしろそれがいい。相談者自身が相談している風を装って、実際には解決を求めている場合だってあるのだし。

・正しいことや、ありふれた言葉に気をつけること

夜回りで声をかける際、見知った相手ならばいいが、馴染みのない相手にとって我々の行為は規範的な意味を帯びる場合がある。というのも、この国では屋外や公共施設で寝泊まりするのは常識的ではないからだ。警備員に追い出された経験をしている場合も多いだろうし、周囲からの奇異の目に怯えているかもしれない。そうした状況で、「ホームレスですか？」などと聞かれたら、責められているような気にもなるだろう。

声かけについてはやむをえないところがあるが、面談中に発する言葉には注意する必要がある。たとえば、妊娠あるいは出産したばかりの女性と話すとき、彼女たちは堕ろすべきではないとか母親が子供を育てるべきだとかそうした価値観から責められるのではないかと警戒していたりすることもあるだろう。もしこちらがそうした価値観を滲み出してしまったら、それに怯えて判断を歪める可能性がある。

これはわかりやすい例だが、基本的に面談に正しさとか常套句はできるだけ持ち込まないほうがいいと思う。それは社会一般にいきわたる権力を支援関係に持ち込むことである。抑圧されてきた人間に同質の抑圧をもたらし、問題を再生産してしまう可能性だってある。それに世間の価値観から離れたほうが解決策は豊かに見出されるに違いないのだ。

あるいは逆に、相談者が常識的でいい子風の発言をあえてする場合がある。精神科医の中井久夫は、こういう発言は適当に流すとどこかに書いていた気がする。あまりこれを取り合って褒めたりすると、こちらがそうした価値観であることを表明することになる。相談者はいい子ではないからわざわざそういう発言をして機嫌をとろうとしているのだから、となれば彼は我々に受け入れてもらえないということになってしまうのである。良好な

支援関係のためには、やはり常識はいったんよけておいたほうがいい。

・与えすぎないこと

人間は交換する生き物だ。献身は美しいかもしれないが、やってみるとなかなか辛い。与えた分は返して欲しくなってしまう。だから、勝手に与えすぎないことが重要である。

なんの話かわかりづらいかもしれない。支援のとき、あれもしてやろうとかこれもしてやろうとかいって親切心でやってしまったりする。けれど相手がたまたま不義理な人だったり、あるいは親切心が相手の意志を確認しないまま先走っていたりしたときには、その労力は全く実らない。すると腹が立ってきて、「ちゃんとしろ！」と言いたくなってきたりする。支援が支配にかわってしてしまうのだ。また、そういうときは支援者側もつらい。

親切なものも考えもの。どうしてもと頼まれたとき、しょうがねえなと言って少し手伝うくらいが丁度いいかもしれない。

・嘘に寛容であること

すぐにバレる嘘をつく人は、不思議なほどたくさんいる。そして嘘が一つだけということはなかなかない。嘘をついたことをあまり責めてはいけない。他の嘘の告白が難しくなってしまうからである。僕は「えー、かんべんしてよ（笑）」くらいにしている。

他にもいろいろあったような気がするのだけれど、とりあえずここまで。

世の光、地の塩。

小山田伸明

「淀み」という概念は、流れの悪い小川や、外界から遮断された室内の空気、立ち行かない時の雰囲気として理解されるものと思う。例えば空気や思考の流れが悪くなるとそこには雑菌や、悪い妄想が繁殖して黒ずんだりもするだろう。人の気持ちが淀んでしまえば、そこに停滞したままどこへも行けないということもある。そしてどこへも行けない時、生き物はゆっくりと腐ってしまう。

休題

初めましての方もいるのやもしれません。改めまして僕は現在、北海道大学で大学院生をしています。無用な情報ですが、悲喜交々を経験して現状ではどちらかといえば厭世的な根暗の25歳に仕上がっています。所属している研究室では僕に限らず家に帰るのが2日に1日程度で、みんなどうにも辟易しているのをひしひしと感じています。今日もこの空気は淀んでいます。ある人は就活をしていたり、ある人は卒業論文を書いていた、ある人は院への進学に向けて準備をしたりなど、そのどれにもどこか暗い影をみえます。彼らの思考は――僕の思考は――停滞しています。同期の学生は実験がうまくいかずモチベーションもつかめないまま一年が過ぎ、泣きながら母と電話をしたと聞きました。最初は博士課程を考えていた彼も今は就活をしています。社交的で気丈な彼に“本当は”どうしたいかと聞くと「わからないよ」と返答をくれるので、僕まで頭を抱え込むこと最近です。

こんな時に思い出すのは高校の時の部活の同期でした。僕と同じタイミングで高校からバレーボール部に入った彼は、これまた僕と同じく高校3年になっても荷物持ちと球拾い、それにお茶汲みをしていました。僕はとにかく苛立っていて「くろちゃん。悔しくないの？」と八つ当たり気味に聞いたものでした。その時彼はすこし俯

いて、やはり「え、わからないや」といったのを思い出したわけです。それはおそらく午後10時過ぎの2人だけの体育館で、今日みたいに淀んだ2人の会話でした。

こんなクソみたいな生活の中で未来も曖昧なまま、そのくせ僕も同期も先輩も後輩もここを離れられません。それは僕らを導く光の不在であり、光の下へ続くと流れの滞留であると思えました。この社会の多くの淀みは、絶妙なバランスで人をそこに留め置き、生かすことも殺すこともせず、ゆっくりとその命を酸化させていくように見えます。全てを忘れさせる光、全てを癒す温かみ、全てを圧倒する優しさ、そんなものを求めるのは僕らがゆっくりと壊死しているからでしょうか。

ホームレスと生活困窮者と学生と労働者と、その全てに通貫するように淀みがあるものと感じます。その先に行くのにどんな風があれば、どんな希望があれば、どんな太陽があればいいのか、温かく優しい光をどこに見出せばいいのかそれを考えてばかりいます。もしも”それ”が見つければ、吹き出すようにそこへ流れていけるのにとおもいます。或いは僕らは粘菌のごとく一緒くたになってそれに向かってにじり寄って行けるのにとおもいます。お腹も空いていませんし、寒くもありませんし、暇を持て余していませんし、孤立していません。それでもどうにも動き出せないこの停滞感の首ねっこには、僕が夜回りで感じた無力感の答えがありそうな気がします。とにかく幸せに向かって歩き出すために、一体何が足りないというのか。こんな気持ちの時には、朝ぼらけの”小枝”で誰かと話し合うのを妄想します。もしかしたらそれだけが、光に向かう道があるという期待感だけが、僕らを導くのかもかもしれません。鼻先の人参が”正解”(注1)なのだとしたら、せめて誰かに搾取されない、少年の夢のような人参が有ったらいいなと思えます。或いは”それ”が見つかるまで、風が吹かないのならせめて塩を振って、光が差さないのなら火を起こして、淀みの中でも腐らないように生きていたいと思います。以上思うばかりの25歳です。くそつたれの小便垂らしです。ああ・・・クソクソクソ。どうもすいません。

(注1:平成31年3月某日、数年前のノートに「ろうふく 自分の答えをださねば」との殴り書きをみつける。)

『忘れられる人々』

柿崎さとみ

2019年はアフリカ、ケニアで迎えた。それからタンザニアに向かい、ザンジバル島へ行った。アフリカは最高だけど遠い。時間がかかる。21世紀になっても遠いザンジバル島、しかし150年前、そこには日本人が住んでいた。明治政府、外貨獲得のために売られた女性たち。そこには娼館があり数十人の日本人女性がいた。最後の日本人娼婦の帰国は1959年。今でもザンジバル島には観光地としてジャパニーズ・ガールズ・バー跡地が残っている。植民地時代に建てられた旧市街。迷路のような石の小路をぐるぐる回ってたどり着くと現在は土産物売る一角になっている。ジャパニーズ・ガールズ・バーの看板。気さくな地元の人は場所を指差して教えてくれる。娼婦だったある女性は商才もありバーを開業し、様々な貿易で大金を稼ぎだし一時は現在のお金で一億円も家族に送金している。身ひとつで稼ぎ出した大金は第二次世界大戦で多くの国々の敵国となった日本のせいですべてを失い取り上げられ、無一文になる。世界各地に売り飛ばされた女性たちは外貨を必要とした日本の近代国家への礎となり、そして忘れられ、存在もほぼ消され誰にも語られる事もない。

テレビ番組で釜ヶ崎を見た。日本のあらゆる建築現場で働き、都市国家を形成した。誰かデキル人が設計し、計画し、金を出しても 実際に現場で働く人がいなければ線路も橋もいかなる建造物もない。現場で働いた多くの人は使い捨てられた後、放置され、ホームレスやアル中になれば社会から疎まれる。わずかな生活保護の受給でさえ容易ではない。自分が身体を張って建てた建造物から追い出される皮肉。彼らが建てた高層建築で快適に過ごす人が彼らについて語る事はない。

ろうふく会で支援し、施設に入居し窮屈な生活を強いられている W さん。お見舞いに行くと喜んでくれた。私は「また来ますね」と言ったまま 数カ月間訪問していない。彼の生活を改善したいとみんなで話したまま、何もしない。ここにも忘れられた人がいた事を思い出した。

「上を向いて歩こう」

越橋宣之

この1年、反省しなければならないことでいっぱい。期待を寄せてくださった方がいたにも関わらず、私として何もすることができなかった。冗談を言って人を楽しませることも、進んで人を支えることも。きっと寄り添いを求められていたが、私は自分の立場や立ち居振る舞いばかり気にして怖じ気づいた。いつの間にか支援することをやめにして、ただその場にいただけの人間になってしまった。

書くこともやめた。ある人について書いた文章が、当人を傷つけかねない内容だったからだ。私が知ったことは決して外部の知らない人に流してはならないものだった。それを気に留めずペンを走らせたのだから罪は重い。無断で自身について書かれたご本人が、印刷したその文章を破り捨てずに、大切にしまっていると話した時の表情、涙を流すほど失望した周囲の光景が脳裏に焼き付いている。

ひどいことをした私だが春から情報を伝える仕事に就く。もはや職業失格だ。でも頭は書くことしか能がない。ほんとにどうしようもない人間である。だが伝えることで社会は変えられる空回りした自信だけはみなぎっている。伝えたい思いだけは不屈だ。大学生活で労福会など人を支える現場に立ち会い普通の学生では目にできない様々な経験をさせて頂いた。同時に優しく接して下さる方々の出会いにも恵まれた。「ありがとう」だけではとても言い尽くすことはできない。だからこそ、支援の場から離れ仕事を始めたとしても書きたいという気持ちがある限り、誰かを支える意識を持つことを大切にしたい。それが私の果たすべき責任だと思う。

話を伺い文字を打つ時は、あらゆる存在に思いを馳せるため立ち止まる心構えを忘れず、常に人を思える人間でありたい。

そして過ぎ去った日々や喪った人を思い出した時は上を向いて歩こう。

長々と書いて参りましたが、心身ともに健康ですのでご安心ください。最後になりますが今まで大変お世話になりました。いつか、北海道へ戻って参りますが生存確認絶賛お待ちしております！

私と労福会

関本幸一

配慮することは難しい。夜回りや炊き出しなど、労福会の活動を通してそんなことを思った。配慮は、相手の気持ち、相手と自分との距離感、周囲の状況、さらには自分の状態など、様々なことを考慮した上で行動しなくてはいけない行為と考えられるからである。さらに、配慮の方向性を間違えると、空気を読んだり媚びているように見えてしまう、あるいは過剰な配慮は相手の重荷になることがあるからだ。

配慮という言葉は知っているつもりだが、実際行動できているかどうかは定かではない。本当の配慮とはどんなものなのか。未だによくわからないため、実際に行動してみたり他の人達の行動をみたりしながら、考える会の会員らしく考えていきたい。

わたしが路上生活者に関心を寄せるようになったきっかけは、現在の北6条エルムの里公園が平成14年(2002年)リニューアルに伴い、撤去作業の時でした。

その前のここは鉄道高架下のため、暗黙のうちにテント村のようになっていました。東京上野公園のようにここで暮らしている人もいるのだなあとと思うくらいの感じでしたが、撤去してどこへ行くのかという事が気になり、札幌市の住宅課に問い合わせたところ、それはもともといなかった所だから、それぞれの元いた場所に帰ってもらうだけだといわれました。

そういうものかなと思っていたのですが、そのうちどこにも行くところのない人の中で重い病気になり救急搬送される事態が起きました。そして初めて彼らの健康実態や生活状況に目が行くようになりました。

2004年ころから労福会の活動に参加させていただいております。当時は支援団体もわずかで、困っている人が誰か知り合いに個人的に相談にのるような活動でした。炊き出しも月に1回程度で、無い月もありました。

炊き出しをすると、「路上の鳩にエサをやるようなもの」と言われたこともあります。継続して炊き出しができる経済力も人員もありませんでした。

そのうちに支援団体やNPOが活動を始めるようになり、彼らの受けることのできるサービスも幅を広げ、わたしたちも少しは落ち着いて相談にのることが出来るようになり、必要な人には継続して関わられるような時間が取れるようになりました。

もともと労福会は学生が主体となって活動していましたので、その中で社会人は少数派でわたしたちは「シルバー4人組」と言われていました。

曲りなりにも活動を続けて、良く分かったことがあります。それは常に彼らに関心を払うことが、信頼につながり遠まわりでも一番近い一歩だと知るようになりました。

以前に彼らから言われたことがあります。活動時には良いとをたくさんお話するのに、活動していなときにはシラン顔をしたり、わざわざ遠回りをして視線を合わせないようにする人もいます。そういう人のいうことは信用できないと。

日常的に信頼できる親密な人間関係を保つ事や、日々一貫した思いやりのある関係を築くことは、一朝一夕で出来る事ではありません。なかなか困難で、また苦痛をともなうこともあります。時には荒々しい言葉で、突き放されることもあります。これは彼らの孤立感・恐怖感・焦燥感の現れだと考えるようにして、ゆっくりと関係を深めることが大切だと考えています。

わたしたちは失敗、挫折、失望などの困難に突き当たった時、「人のつながりがあれば乗り越えられる」と言われています。喜びや楽しみを共有できる家族や友人・仲間の存在が不可欠で、辛く苦しいことも家族や親密な人のためなら頑張ってやり遂げられるし、たくさんの人と関わりあっていくことで、多くのことを学ぶことができます。

人との関係が生活に楽しさを呼び込み、人間らしく生きることを意味を自覚し、自らが成熟するチャンスを与えられているのだと思います。

人は弱いものなので、路上生活の彼らだけが特別な存在ではなく、お互いの弱さを受容し、支えあってともに生きる喜びを分かちあいながら成長し、成熟した社会を創ることが大切だと思います。

わたしたちはもう少し周りに目を向ける機会を増やして、相談したいが誰に言えばよいのかわからない人や知らない人に相談する勇気がなくて困っている人達の社会的孤立を防ぎ、人間関係を紡ぎ育み続けることが大切だと思います。

彼らは、仕事・家族・住居の問題が複合的に絡み合い、病気やけが、アルコール依存症などの心の病気、借金問題などが複雑に関連しているので、一朝一夕で解決できない問題が多々あります。

しかし、路上生になった原因はそれぞれだとしても、彼らの人生の軌跡を垣間見ると、同じ街に暮らす人間として看過できない事だと思います。

彼らは、「助けてもらふ発想はなかった」「今の自分は努力しなかった結果だからしかたがないと、つい自分を責めてしまう」「相談すれば負け組になる」「1 度でも助けを求めたらもうそこで終わり」というように、今の社会的風潮に呼応したかのように自己責任を言う人が多いように思います。

わたしは視力が低下し、夜回りなどの活動ができないので、通院などで街を通る時に彼らに声をかけるようにしています。

「うるさい！まるで山の神だな」と言われてしまいます。彼は彼なりに精いっぱいがんばって見せているのでしょう。

しかし、会う間隔がしばらく空くと「体調が悪いのかい」とか「この間変な人に声をかけられたさ」などと話をします。強がってはいても、やはり誰かと繋がっていたいのだなあと言う事がわかります。

わたしは同じ街に暮らす人間として、地縁や血縁を乗り越えて彼らを暖かく見守り、支援を継続することが大切だと考えています。

声高に自己責任論が述べられる一方では、援助を申し出てくれたり、暖かい声かけをして下さる市民の方も大勢います。

どのような状況になっても住みよい街である事が、路上生活の彼らだけではなく、わたしたち全員の課題であると思います。

「アラサーにして」

波田地利子

海老沢事務局長をはじめ、皆さんお疲れ様でした。今年はまたなんだか大変だったような気がします。

特に学生が少なくなっているというのは肌身に感じるところです。

あっという間に卒業してから5年も経ちました。ろうふくと出会ってから6~7年ということになります。真っさらな若者というには年を取りすぎていて、しかし青二才には違いない。厚生労働省の定義では普通に「若者」に入る年頃、それがアラサーです。

新入生とはもう10歳差。自分の中ではまだ学生気分でも、相手からはどう見ても「年輩者」です。しかも現職がホームレス支援というと、まるで「プロ」(そんなものないのですが)みたいで、ホームレス支援ってなんだろう？と興味を持ってきた若者が、私(や同業者)の言うことに忖度して、萎縮して、そのまま信じてしまうのではないか？

と思ったけどそうでもないです。自分は元々あんまり重くみられないほうなので心配なかった。それはそれで悲しい。

とはいえ、気をつけるのに越したことはありません。

見習うべきは、いかに若者と対等な関係を築くかという点で、楠さんはずば抜けていると思います。

率直に言って、年齢が何十歳も離れていれば、そりゃ学生の姿勢や意見を「若い」として取り合わないというのは、自然なことでしょう。

「私が若い時には…」

「自分は何十年も〇〇をしてきた経験があり…」

「そんな風に考えていた時期が俺にもありました(刃牙)」

私なんかは完全に気質としてはそっち側の才能に溢れており、たぶんあと20年もしたらとんでもない食わせ者の婆さんになるに違いありません。老害というやつです。回避したいけどたぶん無理です。

楠さんは、年下の男性のことを「さん」で呼ばれています。会議で異論があれば、震えるほど感情を滲ませて気炎を吐いても、威圧的な感じがありません。

学生の頃は「威風」「大人の余裕」に憧れたこともありました。他でもない自分が言うだけで話に重みが出るなら、どれだけ生きやすいだろうかと。

「対等な目線で」というのは自分が上である前提の言葉です。そうじゃなくて、本当に「降りていける」ひとは一握りでしょう。なぜなら、ひとは自分を変えたくないし、安全なところで安心してモノをいいたいからです。

最近、私も呼称に「さん」を用いるようにしました。これは、社会規範としてそうすべきだと思っているわけでは決してありません。ただ、ナチュラルにやっている楠さんがすごいなあと思ったので始めただけなのです。これで楠さんのようになれるとは、ちっとも自信がありませんが。

私と労福会

平家勇大

正直に言うと、労福会に対しては、引け目が先立ってある。私が会の活動に足を運んでいた期間は、冬の人数調査から始まって半年と少しだろうか。人数調査に、夜回りに、生活保護の申請同伴。それから、札幌を離れて名ばかりの会員となった。他の会員の方々の献身を横目にしながら、自分が何かの役に立てたと思えたことは遂になかったように思える。

労福会の存在自体は、かなり前から知っていた。興味はあれど、自分が関わることで生じる責任というものを考えては気が重くなり、足を踏み出すまでに時間がかかった。もう少し早く足を踏み出していれば、当事者の方々とも少しは深い関わり方ができたのでは、と後ろをみてばかりである。後ろ向きかつ、自分のことばかりで恐縮だが、まずはそう懺悔しないと、まともに何も書けないような気がするのだ。

そんな引け目はあれど、労福会で過ごした半年間は、忘れがたい。夜道を歩くときに、目の端でホームレスの人を探すようになった。そして、札幌の冬の夜の凍える寒さと、寂しさが、ふっと蘇ることがあった。自己責任論に、ザラザラした嫌な感覚を覚えるようになった。そういう自分の中の肌感覚は、決定的に変わったのではないかと思う。

4月から新聞記者になる。在籍中は役に立てなかったが、せめて労福会で過ごした時間を意味のあるものだったと言えるような、まなざしを持っていたい。

短い間でしたが、温かい場所をありがとうございました。

先週の夜回りで会ったホームレス状態の女性の話。身なりをパッと見てその人がホームレス状態だなんてまず分からない。いつも夜回りで会う男性ホームレスの人から「あの女の人、ホームレスですよ」と教えてもらって、その日初めて声をかけた。夜回りで初めて声をかけるのはいつも難しい（怪訝な顔をされるし）ののだが、その女性は声をかけられるのを待っていたかのように快く応じてくれた。

とてもよくしゃべるし、受け答えの声もはっきりしている。場所は教えられないけど、夜は寒さをしのげるところで過ごしているのだという。真冬の札幌でそんなしんどい過ごし方しなくてもいいでしょうと、僕は札幌市内の支援団体の女性用シェルターを紹介しようかと伝えた。しかし彼女はすでにそこは利用したことがあって、3日間に出ることにしたそう。理由は大家さんが大量のヘビを部屋に入れてくるからだと言っていた。え？ヘビ？とか思ったのだが、とりあえず、ええーっホントですかあ、などと言いながら話を聞き続けた。彼女は三つの名前を持っており、それは警察官のときと覚せい剤の密売をするときなど状況に応じて使い分けているのだという。顔は大まじめだったので、僕は彼女にツッコミを入れることができないまま話を聞き続けた。また、今ある札幌のホームレス支援団体の多くは自分が最初に立ち上げたもので、もう少し組織形態をしっかりとしたものにするべきだったと後悔しているとも言っていた。その他にも、結構な金額のお金を人に貸していて、その借金を返してもらえれば生活は立て直すことができるのだが、なかなか返してもらえないこと、返してもらえれば本州に行ってホームレス支援に本格的に力を入れたいと言っていた。身の回りのことを助けてくれる「いところ」がいるらしく、ただよく話を聞くと、いところがものすごくたくさん的人数になってしまう。果たしてその人は実在するのか、そしてその人はいところなのだろうか。

結局、ひととおり話を聞いた後、労福会のビラを渡して、何かあったら連絡をくださいと言って別れた。それ以外に彼女に何もしてあげられなかったのだ。

あとで聞いた話だが、彼女は札幌市内のほぼすべての支援団体のお世話になっていて、そしてすべての支援団体の支援を自ら途中で絶ってしまう人らしかった。支援団体の人たちも彼女にどんな支援をしていけばよいのか打つ手がないう状態だという。さて次の夜回りで彼女に会えるだろうか？労福会には何ができるだろうか？と思いながら夜回りに臨もうと思っていたら、先日、家の周りの路面の氷割りをしていてギックリ腰になってしまい、歩くことがママならなくなってしまった。次回の夜回りは欠席だ。

この1年、私はどれだけ会員としていられただろうか。ほんの数回だろう。それでも毎週土曜日は札幌エルプラザに心寄せる。会員でありたいと思う。これからはじまる1年は、また違うものにしたい。